

HEARTFUL

笑顔と心をつなぐネットワーク はーとふる

2024年
春号

特集

明るい社会づくり運動 提唱55周年 ——つながる。これまでも、これからも

| 連載 |

なんでも知っとこゼミナール

ふるさとわが街

Meisha 55th Anniversary





素敵な『トリセツ』

テレビからこんな歌が流れてきて、いろいろ考えさせられました。それは、西野カナさんの「トリセツ」。歌詞の前半を紹介すると、こうです。

♪この度はこんな私を選んでくれてどうもありがとうございます。／ご使用の前にこの取扱説明書をよく読んで／ずっと正しく優しく扱ってね。／一点物につき返品交換は受け付けません。／ご了承ください。

急に不機嫌になることがあります。／理由を聞いても／答えはいくせに放つとくと怒ります。／いつもごめんね。／でもそんな時は懲りずに／とことん付き合ってあげましょう。

定期的に褒めると長持ちします。／爪がキレイとか／小さな変化にも気づいてあげましょう。／ちゃんと見ていて。／でも太ったとか／余計なことは気付かなくていいからね。

もしも少し古くなってきた／目移りする時は／ふたりが初めて出逢った／あの日を思い出してね。

これからどうぞよろしくね。／こんな私だけが笑って許してね。／ずっと大切にしてくね。／永久保証の私だから。



川端 健之

特定非営利活動法人 明るい社会づくり運動理事

結婚のときに奥さんが『取扱説明書』を渡すのって、結構良いアイデアかもしれないね。いや、旦那さんの分も奥さんに渡しておく方が無難でしょうか？

私の結婚記念日は昭和55年1月23日。「ゴーゴー、1、2、3」ということで、結婚記念日を忘れて奥さんがおカムムリ！というリスクは小さいのですが、そんな些細なことがきっかけで夫婦の間にヒビが入ることだってありますね。

夫婦、親子、兄弟、親戚、先輩・後輩、職場の上司・部下など……数限りない人間関係の網の目の間で生きている私たち。何かあった時、そのお相手に関する『取扱説明書』を引っ張り出して、問題解決のヒントを見つけるためにページめくっている。そんな暇なんてあるのでしょうか？そして日々、私たちは人生を前に進めるために、否も応もなく、自分の「カンと度胸」でその荒波を乗り越えていかなければなりません。

でもいま、私の手元に一冊の本があります。ページをめくると、そこに書かれていた『思えば、思われる』——この言葉こそ、最強のトリセツだと思いました。

耀メッセージ

- 1……**特集** 明るい社会づくり運動提唱55周年 —つながる。これまでも、これからも
- 10……なんでも知っとこゼミナール
- 12……Palネット
- 15……全国清掃キャンペーン 明社人みんなでゴミ拾い2023 (後期活動報告)
- 16……ふるさとわが街

掲示板

耀！連隊 明社レンジャー

Contents

はーとふる2024年 春号

【目次】

特集

明るい社会づくり運動 提唱 55 周年

—— つながる。これまでも、これからも



「明るい社会づくり運動」が提唱されて、今年で 55 年を迎えます。明社運動の神髄は、感謝と思いやりの心を通わせ、その輪を広げる一人ひとりの働きかけにあります。今号では、提唱者・庭野日敬師の言葉を振り返るとともに、これまで明社運動の灯を絶やさず、歩み続けてきた方や、明社運動を次代へつなごうと取り組んでいる方々を紹介します。

提唱者・庭野日敬師の言葉

何でもないような細やかなことでも、一つ一つを大事にして、時間をかけて積み上げていく。それが必要なのですが、なかなか骨の折れることです。

ところが世の中には、肝心の土台づくりをそっちのけにして、天下国家ばかりを論じている人がいます。

また、そうすることが平和につながるのだと

思い込んでいるのは困ったことです。

朝、道路の清掃を続けているうちに、自分もあの人の真似をしてやってみようという同じ気持ちの人たちが、ひとりふたりと集まって運動を盛り上げていく。

私は、明社運動はそういう形のものであってほしいと願っているのです。

（『明るい社会づくり運動読本』32頁から抜粋）



明るい社会づくり関西地区推進大会で講演する庭野師（1969年5月）

「世のため、人のために」

檜昌利さんの蒔いた種^ま

徳島市街から30キロほど西に位置する山川町は、吉野川とその支流沿いに広がる町。1300年も昔から和紙が作られてきたことでも有名です。1955（昭和30）年の昭和の大合併によって誕生し、さらに2004（平成16）年の平成の大合併によって現在の吉野川市山川町になりました。

この地で生まれ育った檜昌利さん（享年90）は、地元の鋳業会社に就職しましたが、鋳山が閉鎖され、山口県の鋳山で仕事をするために引越しました。そして、定年を迎えたのと同時に、郷里の山川町に戻ってきたのです。

そんな檜さんを持ち受けていたかのよう^{ひのきまやせし}に、1978（昭和53）年4月、徳島

県に提唱者の庭野日敬師を迎え、「明るい社会づくり運動

徳島県推進大会」が開催され

ました。檜さんは知人に誘わ

れて参加しました。会場には、

檜さんの甥である瀬川一夫さ

んの姿もありました。瀬川さ

んもまた檜さんから誘われて

参加したのです。

講話に立った庭野師は、「心

の持ち方次第で、人生は明る



くも、暗くもなる。〃世界は二人のために〃ではなく、〃二人が世界のために〃という生き方。そして、人さまを自分と同じように大事にし、相手の目を見て笑顔で挨拶を交わし合う社会に」と話しました。檜さんはその言葉に心を揺さぶられ、「私も地域のために何かをやらんならん！」と、大会のあった翌月に「明るい社会づくり徳島推進協議会山川支部」（当時）を発足させたのです。





山川支部の発足式の日に。前列右から2人目が檜さん、後列右が瀬川さん

以来、檜さんは学校関係者や民生委員などで組織する「青少年育成会議」で、青少年指導員として健全な青少年育成のための「三つの提言」を掲げられました。三つとは、「なごやかな家庭」「先生同士の明るいふれあい」「町で会ったらどの子もわが子や孫のように一声かける」と



国道 192 号線の清掃をする檜さん夫妻



国道の草刈りをする瀬川さん

いう提言です。

檜さんはそれを自ら実践し、毎日午後3時、JR徳島線の阿波山川駅前で清掃を行い、列車から降りてくる学生たちに向かい、「気をつけて帰れよ」「どうした!? 元気ないなあ」と声をかけました。

また、道ですれ違う子どもたちに対して、率先して一声かけたのです。それは病に伏せる2007（平成19）年まで続けられました。

阿波山川駅の駅舎とホームを結ぶ通路では、古くから掲げられている看板が目飛び込んできます。そこに書かれてあるのは、『あなたは、あなた。私は私。でもみんな仲良くしましょう』という標語。今も、その看板を見ながら通学する学生たちが大勢います。

山川支部が発足した当時、22歳だった瀬川さんは、「地域のために尽力する伯父さんを尊敬していました」と話します。現在は、「徳島県明るい社会づくり運動うだつ地区」の代表者。腎臓に病を抱えながらも、檜さんの意志を引き継ぎ、国道192号線の清掃をコツコツと続けています。

「私は週に3回、透析を受けています。それでも、伯父が私に見せてくれた背中を思い出し、わずかなことですが、地域のために清掃をするのです」

地域や世代を超えて手を携えて歩んでいくために

「今後の明社活動を考えるワーキンググループ」を結成

「今後の明社活動を考えるワーキンググループ」は昨年9月、東京明るい社会づくり運動区部協議会（以下、東京明社区部協議会）の理事会承認を得て誕生しました。都内の明社運動の現状を把握し、今後の歩みを確認し合うのが目的で



す。同月、東京明社区部協議会内の募集でメンバー6人が決まり（メンバー別掲）、同12月から東京23区内の各明社団体への調査を行っています。

まず、23区内の明社運動を推進する団体の実態を把握しようと、ワーキンググループは22団体にアンケートを送付。現在、回答のあった中から4団体に聞き取り調査を行っています。

アンケートの項目は、①会員数や年齢構成②団体の役員構成③会議の開催の有無と会費の金額、徴収方法などです。回答の中には、やはり高齢化が挙げられており、そうした現状から活動会員の減少という問題が浮き彫りになりました。

23区内には現在、町丁目レベルで分析すると、65歳以上の高齢者が人口に占める割合が50%を超える「限界集落」が15カ所あるといわれます。こうした状況は、都内で活動を展開する明社運動にも当てはまる結果となっています。

ワーキンググループでは、アンケートの結果を今年5月中旬に集計し、地域や世代を超えて手を携えて歩んでいくために、



江戸川明るい社会づくりの会の聞き取りをする木下さんと川本さん

冊子にして年内に発行する予定です。「集計を見て、現状を共有し、そこから今後の活路を見いだせたらいいですね……」とメンバーは声をそろえます。

また、調査では、行政とタイアップで



積極的に活動に取り組んでいる団体や清掃活動に集中して取り組んでいる団体もあり、それぞれの地区の特徴や活動内容なども明らかになりつつあります。リーダーの川本恭央さんは、「驚いたり、感心したり、良い勉強になっています」と話しています。

ワーキンググループ誕生の経緯

「明るい社会づくり運動提唱 50 周年記念大会」が 2019（平成 31）年 4 月 28 日、東京・港区のメルパルクホールで開催されました。その 2 年前から大会の準備をしてきたのが東京明社区部協議会のメンバーでした。企画、運営、進行を担い、当日は、全国から参加した約 2500 人を受け入れました。こうして運動の新たな一步を踏み出そうとした矢先、コロナ禍によって活動が休止され、活動が再開されたのは、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行したあとの昨年 6 月でした。

この間、コロナ後の活動のあり方を模索してきたワーキンググループ発起人の一人、木下欣治さんは、自身の所属する明社団で、会員が高齢化している現状に着目。他の明社団体のメンバーに確認すると、港区でも新宿区でも同じように高齢化が進んでいることが分かりました。そこから、それぞれの明社団体の抱えている課題を語り合うようになり、その課題と向き合い、正しく歩むためのワーキンググループの結成を東京明社区部協議会の理事会に申し出たのでした。

《ワーキンググループのメンバー》

（写真上段左から時計回りに）

木下欣治さん（渋谷明るい社会づくりの会）

川本恭央さん（みなと明るい社会づくりの会）

山本佳子さん（新宿明るい社会をつくる区民の会）

泉兼市さん（千代田明るい社会づくりの会）

吉井克彦さん（中央区明るい社会づくりの会）

野口征宏さん（目黒明るい社会づくりの会）



次世代につなぐ地域の取り組み

“ガラスの砂浜” 清掃にチャレンジ！

長崎県のほぼ中央にある大村湾は、佐世保湾を介して針尾瀬戸と早岐瀬戸という二つの狭い海峡だけで外海とつながっている、とても閉鎖的な湾です。湾内には、イワシなどの魚、タコやハマグリ、アサリのほか、大きな生き物ではスナメリもいて、今はさまざまな生き物が生息しています。

しかし、水深は平均すると15メートル

ほどで潮の流れが緩いため、砂泥やヘドロが堆積し、1970年代から赤潮や貧酸素水塊が頻発するようになりました。台風が去ったあとは、たくさんの流木が漂着し、さらに、波打ち際に上がった海藻が腐り、汚臭を漂わせました。とても生き物が棲める環境ではなかったのです。そこで、きれいな海を取り戻そうと、

2016（平成28）年に長崎県が大村湾

のクリーンアップ事

業に取り組みました。

それは、汚れた砂を

入れ替える際に、海

の汚れにつながるプ

ランクトンを食べ

くれるアサリが繁殖

しやすいように、粒

の小さい「砂」では

なく、粒の大きい「廃

ガラスの再生砂」を使ったのです。浜辺は、長崎空港からのびる箕島大橋の陸側の沿岸で、森園公園のそばにあります。『ガラスの砂浜』と呼ばれ、多くの観光客が訪れています。

この砂浜の清掃活動を定期的に行っているのが、明るい社会づくり運動の推進団体「大村明社会」（会長・井上繁樹）です。8年前に発足して以来、毎月第2



パネルを見ながら大村湾の生態系について学びました



「耀！連隊明社レンジャー」がお出迎え。握手をして「元気をもらった！」と子どもたち



チームワークもバッチリ！



＊ガラスの砂浜に敷き詰められたガラス



同じ班の友だちと力を合わせて清掃に取り組みました



清掃の仕方を真剣に聞きました



海藻ゴミは 100 袋。このほか木切れや缶、瓶なども集められました。重さは全部で 750kg でした

水曜日に欠かさず取り組んできました。そして、今年 3 月 31 日、「大村明社会」と「特定非営利活動法人明るい社会づくり運動」が協働で、大村市内をはじめとする近隣の子どもたちに呼びかけ、清掃活動を実施しました。

「大村明社会」の井上会長は、「子どもたちに砂浜の清掃を体験してもらいながら自分たちの暮らす地域の環境を考えてもらえたら」との願いで、準備を進めてきたといえます。

当日、49 人の子どもたちと保護者をはじめとする大人 46 人が参加。自分たちの

住む地域のことを学び、力を合わせて清掃を行いました。「ばく、がんばったよ！」と笑顔を見せる男の子。「砂浜がきれいになって気持ちいい」という女の子。また、清掃の仕方をスタッフに尋ねながら一生懸命取り組んだ子どもたち……。こうした清掃体験が、今後も地域の環境を考える機会となるよう、地元の人々は活動の継続と広がりに向けて期待を寄せています。角を丸く削られた色とりどりのガラスは、今日も太陽に照らされてキラキラと輝いています。



大村明社会の井上会長から子どもたちに「がんばったで賞」が手渡されました